

常葉学園大学造形学部  
研究紀要 第11号・2013  
夏池 篤 NATSUIKE Atsushi  
杉田達哉 SUGITA Tatsuya  
土屋和男 TSUCHIYA Kazuo  
松浦澄江 MATSUURA Sumie

# 静岡アートドキュメント2011

## SHIZUOKA ART DOCUMENT 2011

日時：2011年12月3日(土) — 11日(日)

会場：静岡県舞台芸術公園、旧マッケンジー邸、片山廃寺跡、大谷の  
古民家（大村邸）

### 静岡アートドキュメント2011を終えて

実行委員会代表 夏池 篤

2011年の12/3～12/11にかけて、静岡に根ざした美術をテーマとする「静岡アートドキュメント」の第3回展が行われた。この企画は、静岡ゆかりのアーティストと県内で美術を学ぶ学生が日常の生活空間に作品を展示し、地域社会の人々に美術をもっと身近に感じてもらうと共に、美術を志す人の発表の場を広げていきたいという思いから始まっている。前回まで静岡市の中心街で実施されてきたが、今回はゆったりとした時の流れを感じさせる郊外の4会場を得て、それぞれの特徴的な景観を生かした作品展示を目指した。

メイン会場のひとつが日本平の中腹にある舞台芸術公園で、これはSPAC-静岡県舞台芸術センターとの共催により実現し、豊かな自然の中と、そこに点在する磯崎新氏設計の劇場などの現代建築内に多くの作品が配置された。もうひとつの展示の中心が駿河湾を眺望できる大谷海岸近くの旧マッケンジー邸で、昭和15年に竣工されたこの洋館は、室内の調度品なども当時そのままの状態を保っている国指定の有形文化財である。この2地点の間に、奈良から平安時代にかけて存在したと考えられる寺院跡で基壇と礎石だけが残る片山廃寺跡と、明治初期に用宗の地に建てられ、明治18年に大谷に移築された古民家がある。この4カ所は全長が9kmほどの距離でつながっており、景観を楽しみながらゆっくり見学するには最適なコースとなった。

会場である楕円堂劇場内で、星野紘（東京文化財研究所名誉研究員、神奈川大学歴史民俗資料学研究科特任教授、元文化庁主任文化財調査官）による「芸能から見た時間・空間・身体」と題した講演会を開催した。これは会場が静岡県の舞台芸術の発信地であり、SPACとの共催事業であったことから、演劇とアートの原点をもう一度考える機会とした。

また今回学生作品の展示空間となっている食堂棟「カチカチ山」では「アートの住まい憧れを田舎に求めて」をテーマにパネリストとして水沼淑子（関東学院大学/居住学）、堀田典裕（名古屋大学/環境デザイン）、栗野隆（東京農業大学/造園学）を迎え、土屋和男（常葉学園大学/建築史）のコーディネートによる環境系の公開研究会が開催されている。

初日には特別企画としてSPACと出品作家とのコラボレーションも実現した。大岡淳演出、SPAC俳優による朗読パフォーマンスが野外芸術劇場「有度」と屋内ホール「楕円堂」地下の作品の中で実施された。パフォーマンスの後には公園内ツアーを実施し、各作品の紹介を行なった。

この企画には約40名の作家と、県内に美術系のコースを持つ常葉学園大学、静岡大学、静岡文化芸術大学の3大学の学生90名が出品者として、また運営ボランティアとして会場で作品紹介・管理・運営等にあたっている。

会場の作品を見ていくと、舞台芸術公園内には、芝生・茶畑・森が広がっており、その恵まれた自然環境を生かした作品として、山本晴康は森の木々と持込んだ角材を縄で繋げながらその空間を鑑賞者に意識させた。小高い丘の上の芝生に

は、ウィリ・ゴンザレスが舞台芸術公園を象徴するように踊る男女の集団を簾による輪郭で表現した。楕円堂前の芝生では小島雅生が金属とパラフィンと水を使い祭儀的な空間を演出した。一方、森の中では中村昌司が朱で塗られた流木を撒き散らし、ギリシャ神話や美術史上の様々な比喩を用いながら原発に対する怒りを作品化した。丹羽勝次は、現在あるこの舞台芸術公園だけでなく、そこがかつてあった有度山の痕跡を探すように会場全体に作品を点在させ、文明とは何かについて問いかける。野外でも通路あるいは広場のコンクリートの上を選択したのは岐部琢美、Gin Johannesである。岐部は円形の鉄板とその間に渡された鉄板の曲がりの関係をミニマルな作品に仕立て、入り口付近の通路に15mに渡って置いた。一方で建築家であるGinは磯崎新氏のシンプルな建築に対抗するようにベニヤ板でダイナミックで有機的な空間を演出した。

二つの劇場の内部空間を会場とした作品では、劇場の持つその特性を意識した作品が多く見受けられた。野外劇場ではその客席全体に柴田美千里が約250組の手袋を使って拍手する手を並べた。展覧会初日、この作品の中でSPACによるパフォーマンスが実施されている。筆者は静岡空港の立木で作った飛行機の骨格模型を舞台に吊るし、上部から空港立地である金谷と舞台芸術公園間のライトシミュレーションを投影した。鍬竹智広は舞台袖の暗がりの空間を利用し6台のポータブルDVDプレーヤーで自己を作品化した映像を流した。

楕円堂は、1階部分の壁面が上方から見ると12角形になっており平面作品が隣の作品に干渉されることなく展示できるスペースとなっている。そこでは小川佳夫が黒く塗り込められた地の中に、闇から絞り出したような光の痕跡を最小限の筆跡で残した。奈木和彦はその壁に花を生るようにシルクの画布に一輪の花を描く。長橋秀樹は激しい身体の動きを平面に留めるようにドローイングした。持塚三樹は側面に色彩を施しただけのフレームを提示した。その一角にはセリ出た空間があり窓の外が一望できる。青木洋子は墨による屏風仕立ての作品をその外の風景に連ねた。地下につながる階段の出窓空間には、江川野智典が中と外の明度差を効果的に使いガラスのオブジェを配した。地下は劇場空間として暗くなってしまっており、映像作品を写すには絶好の空間である。山内啓司は楽屋内部の鏡や椅子に始まり劇場の天井全体に自己増殖する映像を写す。この作品で初日にはSPACとのコラボレーションを行っている。春日聰はバリ島での祭祀記録映像を映写した。この記録は後にSPACの演劇祭でも上映されている。春日はもう1点、旧マッケンジー邸でも震災に絡めた水への記憶を映像作品化している。杉森順子は奥行きのある通路空間を利用してイリュージョナルな映像を映写した。あさのゆきはあえてこの薄暗い空間の中に半透明の布で覆ったオブジェを照明により浮かびあがらせた。



食堂棟「カチカチ山」では常葉学園大学造形学部の2年、3年、4年の学生約20人が展示をしており。その横の芝生では、静岡文化芸術大学の大学院の学生が金属の作品を展示了た。

旧マッケンジー邸は静岡駅より南に向かって4キロほど進み海岸線が見えるところまで来たところにある。敷地入り口では草月流の作家である伊藤怜子が、25mほど続く生垣に無数の白い荷札を取り付けた。よくある景色がわずかにずれるような異空間の雰囲気が立ち現れ、これから向かう会場への期待をふくらませる装置ともなった。奥に入ると建物の横には大きな芝生が広がり、晴れた日にはそこから富士山を眺望することができる。その芝生に岸美智代は借景として富士山を意識し鉄筋でフレームを型取って設置した。庭の植え込みの中には、ガラスのケースがあり中ではファンが回っており、コンピューターの冷却フィンが目に飛び込む。寒い戸外と内部の温度差でその曇りを作品化した田中俊之の作品である。建物の中に入ると、程よい光が室内に差しこみ廊下は水を満面に湛えた加瀬かおりのガラスのオブジェが静かに輝いている。その奥の部屋には、鈴木亘彦のガラスと樹脂の零でできた二つの球体が空間に浮かび上がる。この二つは建物内部における光と影を強く意識した作品となっていた。廊下を境に大小幾つもの部屋があり、それぞれ区切られた中での展示ということからパーソナルな表現が多く見られた。寺田佳央はバスルームのなかで自分の記憶の背後にある感覚を呼び覚ましながら、水にまつわる事象を映像化しそこに投影した。長倉友紀子は、パッチワークの手法でもって自らの身体と表現について考える。小林由紀は、折り紙を並べながら、そのささやかな存在の中にこそ実を感じている。ナガタ・ロッソはウサギの女の子のオブジェと窓に貼られたカラフルなイラストレーションで、室内を楽しい冒險の世界に変える。なかでもチバエンの「YORISHIRO/白雪姫（コンタクトphone）」は、今の時世を強く意識させられる作品で、ベッドが置かれただけのほとんど白一色の簡素な寝室が、彼女の手によるオブジェにより可愛く詩的な空間に仕立てられていた。糸電話をモチーフに「人は時空を超えて大切な人とつながっていたい」とう下りが、今日のコミュニケーションのひとつの姿を象徴している。その一方で、台所に展示された「PERSON AL1000-eye's-」と題された樂土舎、樂土の森プロジェクトの活動記録の紹介作品は、写真が貼られた1000個の小箱が食器棚からテーブルに至るまでうずたかく積み上げられ迫力あるインスタレーションとなっている。それは1997年より舞踏、

ジャズ演奏、陶芸等のイベントを地方から地道に発信し続けてきたもので、その情熱が伝わってくる内容であった。乾久子とドイツ在住の作家福島節子の作品は、日本とドイツの間で交わされた往復書簡を通してお互いが反応しあっていくプロセスを提示する。平川渚はマッケンジー邸の歴史を確認するようにダンカンとエミリーの言葉を真っ白な布に刺繡しテーブルクロスとしておいた。この会場で平面作品だけを展示したのは、1階リビングの岡野訓之と2階客室を使った川邊耕一である。岡野はイリュージョナルな表現で錯綜する空間に定評のある作家であり、川邊はその感性の豊かさと作品の完成度を最近の個展で確認したばかりであるが、この会場は登録文化財であり壁に釘を打つことができない。台をおいての展示となった。

大谷の古民家では、旧マッケンジー邸でも共同作品を手がけた乾久子が、フロッタージュの技法によりこの家で見つけた小物やタンスの表面をそれが持つ時間を確認するように擦り出したものを畳の上に並べた。中村妙は家の中に眠っている細胞を意識し、樹脂粘土を使ってシャーレの中で培養するように縁側に並べた。持塚三樹は二階のかまぼこ形をした天井から、おとぎ話に登場するような動物をミラーシートで型取って吊るし室内の風景に重ねた。この古民家の裏には改修された蔵があり、そこをインフォメーションセンターとして食事やお茶を楽しみながら参加作家の資料を閲覧することができる場として提供した。運営にはボランティアで常葉学園大学造形学部、浜松デザインカレッジ、静岡大学教育学部の学生があつた。

もう一つの会場である片山廃寺跡は東名高速道路が背後にあり、その下方に礎石跡が広がる。北川純は寺院跡であることを意識し、6m近くあるウレタンスponジ製のカラフルな花を手向けた。松浦澄江は水たまりの形のステンレス板に空を映し取る作品と、その場に寝ころびながら高速道路の音を聞く参加型の作品を発表した。高速道路下のスペースでは、静岡大学の30人余りの学生が礎石の上に思い思いの作品を展示している。

今回はSPACの関係者の協力で普段演劇鑑賞以外で入る機会の少ない舞台芸術公園を会場とすることができます。多くの方に会場に足を運んで頂くことができました。また古民家を展示場として提供いただいた大村様には、会場の運営においても献身的に協力いただき大変助かりました。それ以外にも多くの方々のご協力とご支援によりこのイベントを実現することができたことにこの場を借りてお礼申し上げます。

## 参加作家一覧

アイウエオ順

Artgärtnerinnen(乾久子+福島世津子)

青木洋子

あさのゆき

伊藤怜子

乾久子

ウィリ・ゴンザレス

江川野智典

岡野訓之

小川佳夫

春日聰

加瀬かおり

川邊耕一

北川純

岸美智代

岐部琢美

鍬竹智広

小島雅生

小林由季

柴田美千里

Gin Johannes

杉森順子

鈴木亘彦

田中俊之

しばえん

寺田佳央

長倉友紀子

長橋秀樹

中村妙

中村昌司

ナガタロッソ

奈木和彦

夏池篤

丹羽勝次

平川渚

松浦澄江

持塚三樹

山内啓司

山本晴康

樂土舎・樂土の森プロジェクト

## Artgärtnerinnen

アートゲルトナリンネン 乾久子+福島世津子  
INUI Hisako + FUKUSHIMA Setsuko

題名：十万年の始まり  
素材 / 技法：ミクストメディア  
大きさ：4畳半 2部屋  
発表場所：旧マッケンジー邸

お互いの日々の発見、提案、呼びかけ、体験を写真に載せて送る。写真を見せることが目的ではなく、対話の手段としての写真である。日々更新される新しい写真のほかに、過去に提示した写真にも関連写真がジョイントされてゆくこともある。対話は波のように揺れて動いて寄せて繰り返す。縦に横につむがれて行く。それが、ある量に達した時に何が見えてくるのだろう？  
対話は綿々と続いてゆくのだ。表現は、毎日の生活そのものなのだから。ただいま進行中。



## 青木 洋子

AOKI Youko

題名：山の声  
素材 / 技法：紙、墨  
大きさ：六曲屏風一隻（縦 173 × 横 367 cm）  
発表場所：舞台芸術公園「檜円堂」

一本の線を引く。それは原初の宇宙の暗闇へとつながる闇。  
そこからの生命の声を聞く。今の生命を重ねる。  
線を重ねていきながらたちあらわれる世界。  
もう一つの自然になるか。  
山の隣に作品を並べてみたい。



## あさの ゆき

ASANO Yuki

題　名：— cell — さいぼう

素材 / 技法：ミクストメディア

acrylic-color, matte-medium, gauze, plastic

大 き さ：200 × 200 × 100 cm  
(approximately)

発表場所：舞台芸術公園 「橋円堂」

： なかにあるもの ：

その集合体のなかには 個があり

個は 集合体で構成され そのなかには個が  
存在する

それが生命体とすると それは細胞であり

それは核である 原子である

なぜそれが生命体であるといえるのか

それは動いているからである

では なぜ動くのか

それは ものとのとの間のものが 関係し  
ているのか

もしくは ものとのとの相対性に関係して  
いるのか

そのことを 知りたい



## 伊藤怜子

ITO Reiko

題　名：関係

素材 / 技法：荷札 / インスタレーション

大 き さ：h250 × w300 × d2500 cm

発表場所：旧マッケンジー邸



## 乾 久子

INUI Hisako

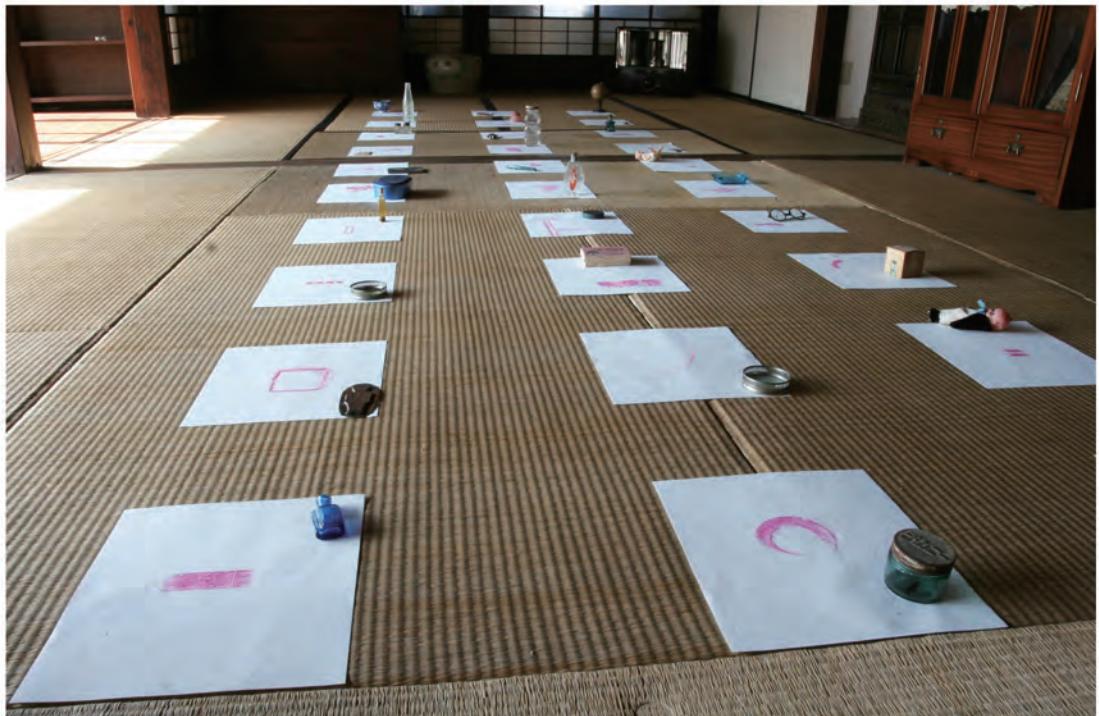
題 名：記憶とカタチ

素材 / 技法：ミクストメディア

大きさ：和室八帖二間の床面にインスタレーション

発表場所：大谷の古民家（大村邸）

大村邸の内と外をフロッタージュした断片と大村邸に存在した古いものたちとを組み合わせて並べた作品。大村邸に流れていた時間と記憶を視覚化してみたいと思いました。不思議だったのは、フロッタージュしたり、モノを見たり見つけたりする行為とその時間のなかで、自分の内側にあったカタチも自然に溢れてきたことです。



## ウィリ・ゴンザレス

Willie GONZALES

題名：人の森

素材 / 技法：ラタン、銅線、絵具

大きさ：h280 × w730 × d500 cm

発表場所：舞台芸術公園 屋外

人を助ける時、あなたの動機は何ですか。私の動機は私と神との関係です。この関係のおかげで私には常に希望と力があります。私はその関係を分かち合い、他の人もこの希望と力が得られるようにと願っています。「詩篇 1:1-3、イザヤ書 40:30-31」



## 江川野智典

EGAWANO Tomonori

題名: Drawing

素材 / 技法: ガラス

大きさ: h50 × w30 × d20 cm

発表場所: 舞台芸術公園 「橋円堂」

感覚と衝動の一筆書き



## 岡野訓之

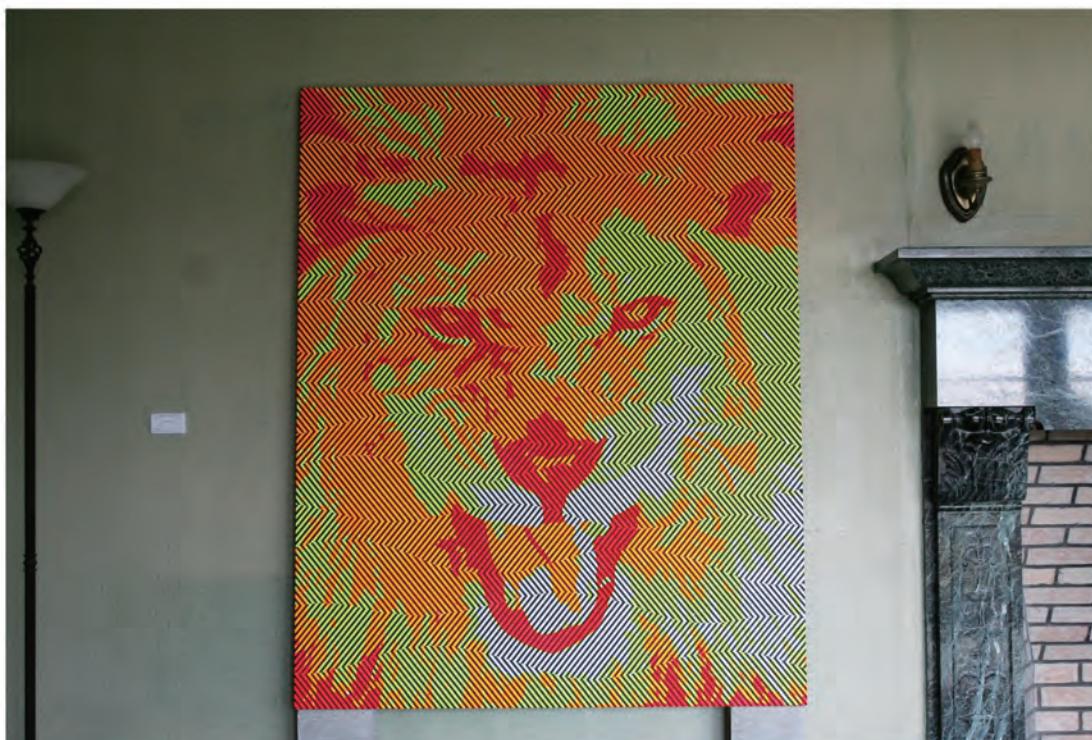
OKANO Nobuyuki

題名: LION

素材 / 技法: キャンバスにアクリル

大きさ: F100

発表場所: 旧マッケンジー邸



## 小川 佳夫

OGAWA Yoshiro

題名：砂の声2

乳と蜜の流れる2

素材 / 技法：麻布・白亞地に油彩

大きさ：130×194 cm

130×194 cm

発表場所：舞台芸術公園 「楓円堂」



## 春日 聰

KASUGA Akira

題名：Sekala Niskala

スカラ=ニスカラ

Rebuild

素材 / 技法：ビデオ

大きさ：40分、投影サイズ可変

発表場所：舞台芸術公園 「楓円堂」

バリ島のトランス・ダンスとサウンドスケープをテーマにした映像・音響民族誌絵巻。「Sekala Niskala」とはバリ語で見えるものと見えないものという意味です。音響と身体技法が溶け合うとき人びとはトランス状態になり、神との交流を果たします。

題名：環太平洋の神話 三部作  
[Horizontal Oscillate, Fresh Ruin - tiny Japanese tea blend -, Das fliegende Klassenzimmer]

素材 / 技法：ビデオ

大きさ：20分、投影サイズ可変

発表場所：旧マッケンジー邸 書斎

私は2004年のスマトラ沖地震の際、発生3日前に大津波の予知夢を見ました。そして今年3月の東北地方太平洋沖地震の際も発生5時間前に予知夢を見ました。海という巨大な生命への畏怖が私の細胞や遺伝子にインプットされていて共鳴したのかもしれません。



## 加瀬 かおり

KASE Kaori

題名：LIFE POOL

素材 / 技法：ガラス 水鏡

大きさ：h15 × w60 × d60 cm

発表場所：旧マッケンジー邸

みえる、みえない

みたい、みたくない



## 川邊 耕一

KAWABE Kouichi

幼いころ、祖父の家にあった納屋の土壁の色や壁の  
引っ掻きキズに惹かれ、何度も見直して見ていた。そこ  
に生命感と躍動感を認識していたのだと思う。こう  
いうものを絵の題材にしてもいいのかな？いつかこう  
いう絵を描きたいな。この時の感動探しは今も続く。

題名：① Floating 11-81

② Floating 11-63

③ Floating 11-64

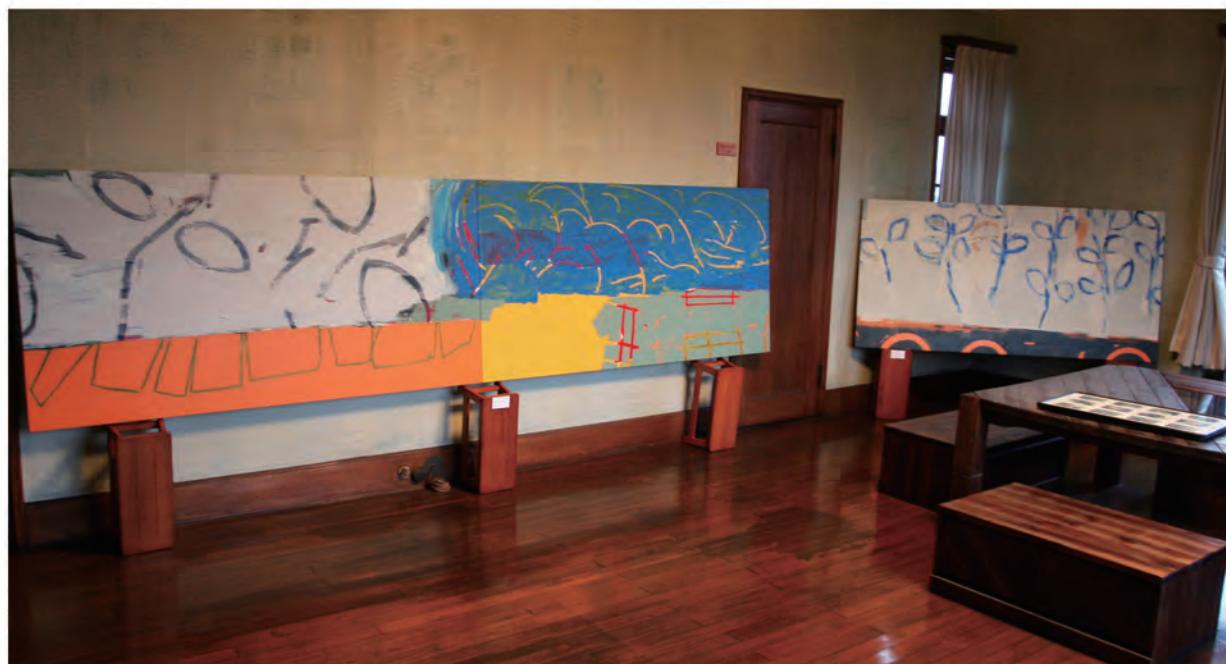
素材 / 技法：油彩、オイルスティック、アクリル／キャンバス

大きさ：① 97.0 × 388.0 cm

② 53.0 × 65.2 cm

③ 53.0 × 65.2 cm

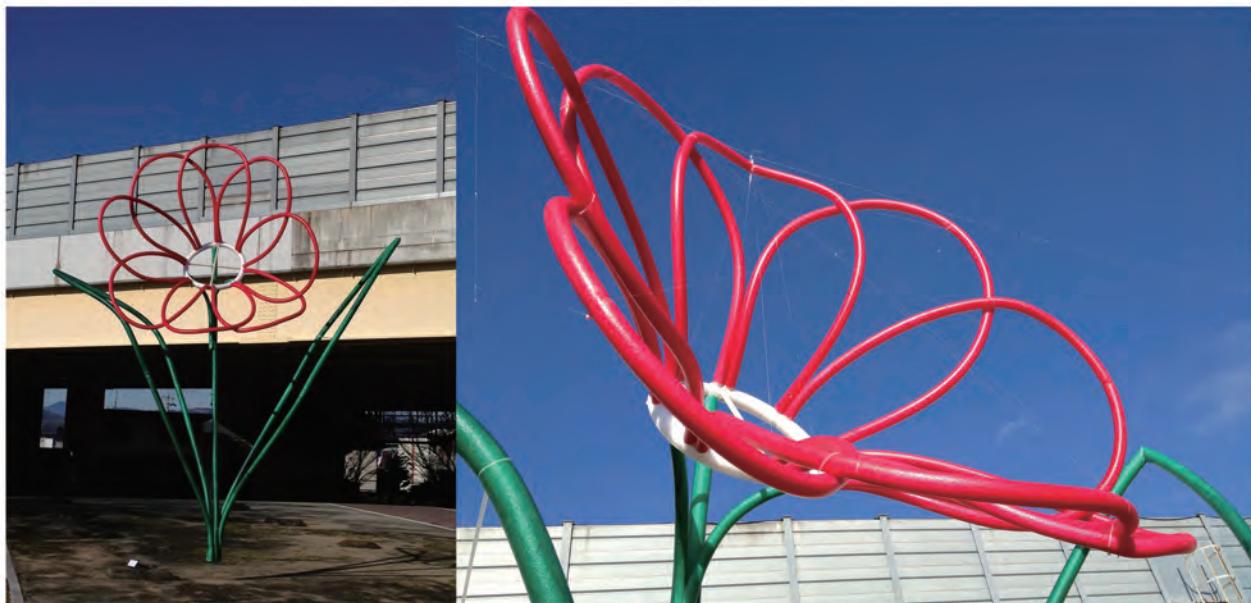
発表場所：旧マッケンジー邸



北川 純  
KITAGAWA Jun

題名：花  
素材 / 技法：ウレタンスポンジ  
大きさ：h5500 × w4000 × d2000 cm  
発表場所：片山廃寺跡

冬の枯れ地に大きな赤い花を生けました。ご堪能ください。



〈報知〉 萩原・松田・十畠・松浦

108

岸 美智代  
KISHI Michiyo

題名：マッケンジー小屋から見る富士山  
素材 / 技法：鉄  
大きさ：h400 cm  
発表場所：旧マッケンジー邸

旧マッケンジー邸の庭の一角にある休憩所。この場所から富士山を見るために建てたという話を聞いた。静岡は富士山の景色を多く捉えてきた街である。実際には富士山を見ることはできないが、私の中に浮かんだ富士山のイメージを庭に描いてみた。



静岡アーティストコレクション2011

## 岐部 琢美

KIBE Takumi

題名：無題

素材 / 技法：鉄

大きさ：h80 × w200 × d1500 cm

発表場所：舞台芸術公園 本部棟前

日本の空間意識を大切にしつつ、表層的でありながら“内部と外部が通じるような構造物”“原初的な風景”“有機と無機の両面を備えたもの”“空間と物質との関わり”などにこだわり、シンプルで緊張感のある空間を作り出すことに心掛けた。「今」という時間と空気、時間の経過に伴うものの「ありよう」が表出できればと思っている。



## 鍼竹智広

KUWATAKE Tomohiro

題名：共通するもの

素材 / 技法：ポータブル DVD プレーヤー

大きさ：ポータブル DVD プレーヤー

× 6(27.5 × 5.6 × 15 cm)

発表場所：舞台芸術公園 野外劇場

「有度」

存在するものは、存在するという共通点で繋がっているのであれば、どこかで全てのモノと繋がる場所は存在するのだろうか。



## 小島 雅生

KOJIMA Masaki

題　名：日輪と月輪のはざま

素材 / 技法：ブロンズ・鉄・ロウ

大 き さ：h250 × w500 × d1000 cm

発表場所：舞台芸術公園 「橋円堂」前芝生

はかなきのもと永遠なるもの

光と陰

それはざまにある、曖昧な世界に咲く花

形あるものと眼には見えないが確かに存在するもの

両極にある関係。しかし密接につながる関係。

太陽と月のはざまに咲く花



## 小林由季

KOBAYASHI Yuki

題　名：波の音が繰り返すように  
蟻が餌を運ぶように

素材 / 技法：鉄線・トレスペーパー

大 き さ：全体 20 × 160 cm

(オブジェ 20 × 5 × 5 cm)

発表場所：旧マッケンジー邸

この場所で呼吸を続けるものを感じたかった。  
昨日の空気があの隙間を見つけて今日の空気になる。

この場所で私の呼吸と重ねてみた。



## 柴田美千里

SHIBATA Michiri

題名：プラポー !!

素材 / 技法：白手袋など

大きさ：

発表場所：舞台芸術公園 野外劇場 「有度」

舞台装置の仕事に憧れて美術を始めて35年、こんな形で演劇とコラボレーションできる日が来るなんて、まさに“プラポー !!”



## Gin Johannes

題名：New York Transit 2011

素材 / 技法：木造 3mm厚シート

大きさ：約 h200x w300x d600 cm

発表場所：舞台芸術公園 野外劇場前広場

ニューヨークで見つけたこと、失ったものを再考する作品。『ブルックリン・ハイツ・プロジェクト2001』を手がかりに都市の情報をマッピングし、再度折り畳み、編み、記憶を紡いでいく。これはネット社会によって世界同時に複数のプロジェクトが可能になったことへの問題提起の一つとも言える。



杉森順子

SUGIMORI Junko

題名：不確実という確実  
素材／技法：映像（プロジェクター、pc）  
大きさ：h240 × w240 × d803 cm  
発表場所：舞台芸術公園「橋円堂」

現実とは何であろう。目の前にある現実は本当に存在しているのか。今見ている世界は果たして真実の姿なのか。否か。時空間はいつの間にかゆがみ、変わって行く。ただ、不確実ということだけが確実なのだ。

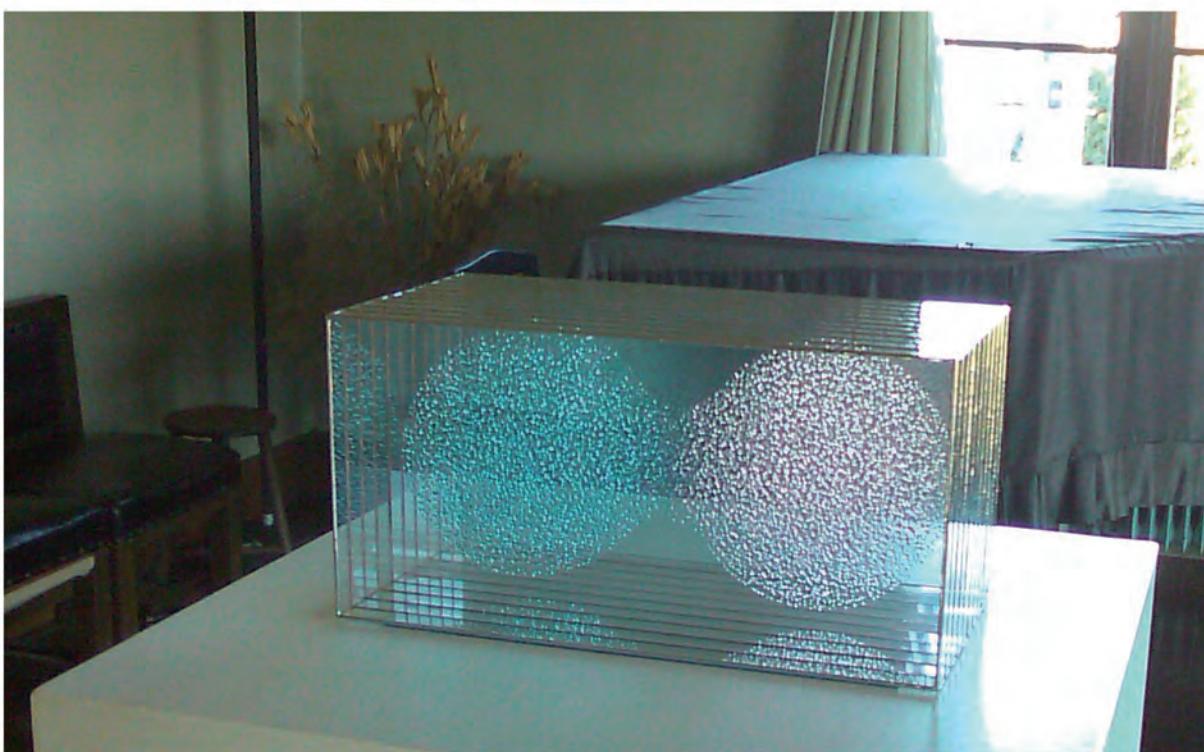


鈴木亘彦

SUZUKI Nobuhiko

題名：時粒 -〇  
素材／技法：ガラス、ハンダ、合成樹脂、顔料、他  
大きさ：h20 × w40 × d40 cm  
発表場所：旧マッケンジー邸

淡く曇った水槽のガラスを小さな巻貝がムシャムシャと苔を食べながら動く様は、見ていて飽きない。蛇行した移動痕はクリアになり箱眼鏡の様に向こうが見える。いつまでも飽きることなく新たな空間の連想ができるような仕掛けのようなものを探しています。



## 田中俊之 TANAKA Toshiyuki

題名：pagoda 2  
素材 / 技法：ガラス、スチール、その他  
大きさ：h50 × w40 × d40 cm  
発表場所：旧マッケンジー邸

電車の窓から家との隙間に空き地があるのを見つけた。草がぼうぼうと繁り、そのあざやかな緑はそこの空気をみずみずしいものに変えていた。それは取り残された場所ではなく、貴重な余白のように思えた。



## ちばえん

CHIBA En

題名：YORISHIRO/ 白雪姫（コンタクト Phone）  
素材 / 技法：布、糸、フェルト、木箱、紙芯、他  
大きさ：一部屋  
発表場所：旧マッケンジー邸

『回向』というコンタクトを「白雪姫」をモチーフに考えてみる。いつの世も、人には時空を超えて、大切な人とつながりたいという欲求がある。7人の小人の想いがあなたの想いとリンクする？



## 寺田佳央

TERADA Kao

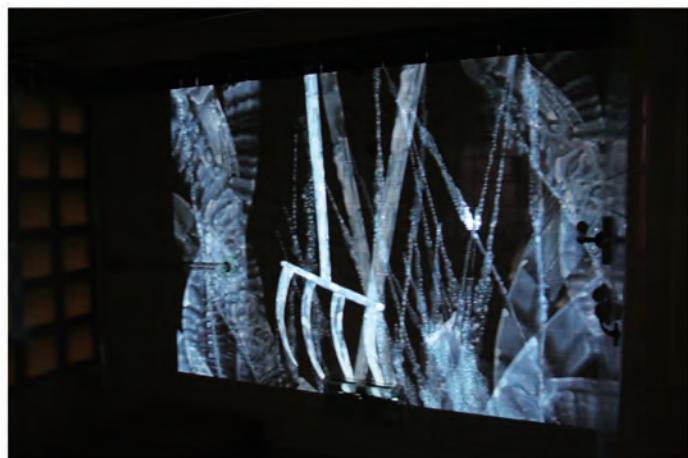
題名：水狩り

素材 / 技法：映像インсталレーション

大きさ：可変

発表場所：旧マッケンジー邸

お湯に浸かったリプールからあがって身体を拭いたりしている時、何かが通りすぎる。人間のずっと前の微小な生きものだった時のこと。いつか分解のうちに帰っていくところ。私は鋤で水をすくう。溺れもする。流れていった像を探りにいっている。



## 長倉友紀子

NAGAKURA Yukiko

題名：Self portrait

素材 / 技法：綿布、糸、ガーゼ、  
寒冷布

大きさ：w200 × d500 cm

発表場所：旧マッケンジー邸

描かれた○を見ることと、丸という文字を見ること。

△と▽は◇になり、菱形になる。

— は線か、棒か、それともただの — ?  
まる○ さんかく△ 視覚□



長橋秀樹  
NAGAHASHI Hideki

題名：「floating」vol.1 / 「floating」vol.2  
素材 / 技法：キャンバス、油彩、アクリル  
大きさ：F150 / F150  
発表場所：舞台芸術公園「橋円堂」



中村妙  
NAKAMURA Tae

題名：呼吸  
素材 / 技法：色鉛筆、樹脂粘土、  
シャーレ  
大きさ：直径6～15 cm  
発表場所：大谷の古民家（大村邸）

丁寧に暮らしてきた古民家の、趣きある落ち着ついた空間に、静かに寄り添う作品を作りたいと思った。長い時間の中で、家のどこから、ひっそりと湧いてきたような生きもののかたち。



## 中村昌司

NAKAMURA Masashi

題名：ヘパイツス（跛者）  
素材 / 技法：流木、セラミカ タフネ  
(布)、綿ロープ  
大きさ：約 h500 × w2000 × d500 cm  
発表場所：舞台芸術公園 屋外

醜い跛者の火之神ヘパイツスが生み出す人殺しの道具は、時代の最先端をいく、優れていて、かつ艶かしく誰もがうっとりしてしまう美しいものであった。同族で殺し合いを続ける人類。すべてがヘパイツスの仕組んだものである。そして、ヘパイツスの末裔は、手にすべきでないものを手にしてしまった。「核」。その代償は、あまりにも大きい。人類は、パンドラの美しさに見とれ乱舞するうちに、終末を迎える。



## ナガタ ロッソ

NAGATA Rosso

題名：Funnimals  
素材 / 技法：立体／クレイ、木、布、  
アクリルガッシュ  
プリント  
大きさ：立体／h150 cm  
プリント／窓枠サイズ5点  
発表場所：旧マッケンジー邸

うさぎの女の子と愉快な動物達の不思議な世界。



## 奈木和彦

NAGI Kazuhiko

題　名：「なみあい」01 ／ 「なみあい」02

素材 / 技法：油彩 / サテン生地・ジェッソ・ジェルメディウム・木製パネル

大 き さ：h100 × w200 cm ／ h100 × w200 cm

発表場所：舞台芸術公園 「橋円堂」

両手一杯に掬っても零れ落ちる雪の内に「たおやか」なる存在が潜んでいる。  
面白いことにその雪は心身を差し出す行為によってのみ僕くも立ち現れてくれる。



## 夏池 篤

NATSUIKE Atsushi

題　名：〈金谷一舞台芸術公園〉

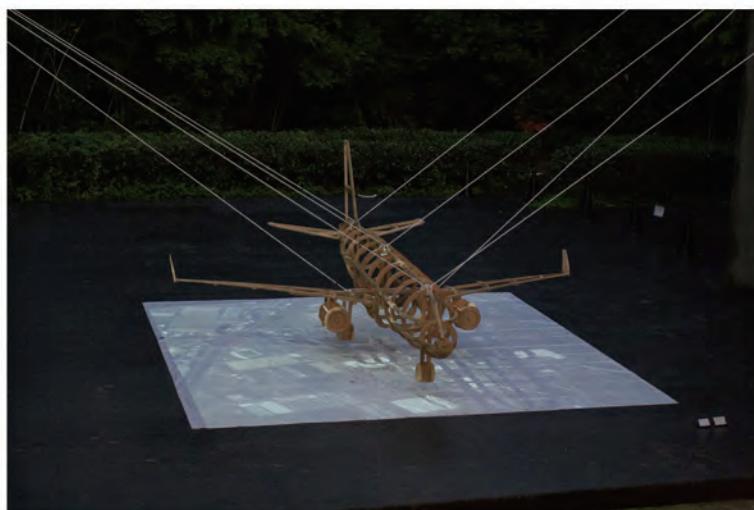
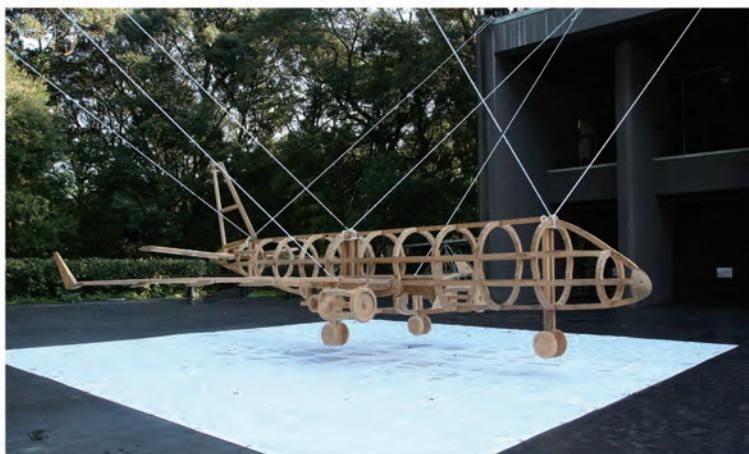
往復便

素材 / 技法：檜、ロープ、プロジェクター、  
DVD、シート

大 き さ：h600 × w1400 × d570 cm

発表場所：舞台芸術公園 野外劇場  
「有度」

静岡空港開港時における立木問題は静岡県の方であれば誰もがご存じかと思います。その立木を譲り受ける機会がありました。そして、その木で作ることの出来たのは飛行機しかありませんでした。プロジェクターにより金谷一舞台芸術公園往復のフライトシミュレーションが投影される中を会期中木製フレームの飛行機が飛び続けます。



## 丹羽 勝次

NIWA Katsuji

題名：有度山・地の紋所

素材 / 技法：ビニールロープ（径 1.8cm）、有度山自然石

大きさ：円周 130cm の白いロープ 70 本と自然石 70 個

発表場所：舞台芸術公園 屋外

先の「3.11」に学ぶものは何か、ぼくは考えあぐねている。そして、かすかに、いや確かに言えることは、あらゆる事や物の在り様が原発の「安全神話」の上に成り立っていた、ということである。それが崩壊したのである。では、どうするぼく（ぼくら）は……。

そこで、今回のアートドキュメントでは「有度山・地の紋所」を手がかりにして、静かに、ゆっくりと自らの足下を見つめ直そう、と思っている



## 平川 諸

HIRAKAWA Nagisa

題名：ダンカン&エミリーの  
言葉

素材 / 技法：布

大きさ：60cm × 120cm

発表場所：旧マッケンジー邸

マッケンジー夫妻がある年のグリーディングカードに記した言葉を、針で布にうつしました。



## 松浦澄江 MATSUURA Sumie

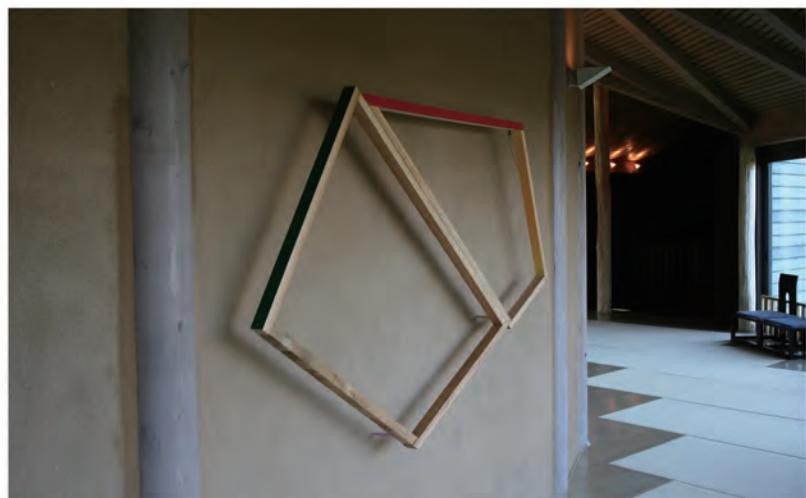
題　名：礎石になって空を見る／礎石になって音を聞く  
素材／技法：アクリルミラー、障子紙、鉄、寒冷紗  
大　き　さ：w870 × d450 cm ／ h90 × w180 × d90 cm  
発表場所：片山廃寺跡

片山廃寺は1200年前の国分寺跡。高速道路がその上を跨ぎ奈良時代と現代が交錯する。地面に置いた礎石型の鏡面に写る空を見ながら真檀に上り、寒冷紗の蚊帳の中に横たわる。そして、ヘッドホンで高速道路の音を聞き、礎石と青空との時間を体感する。



## 持塚三樹 MOCHIZUKA Miki

題　名：シカク  
素材／技法：アクリル絵具、木  
大　き　さ：F130  
発表場所：舞台芸術公園「橋円堂」



題　名：ヒカリトリ  
素材／技法：PET板  
大　き　さ：可変  
発表場所：大谷の古民家（大村邸）

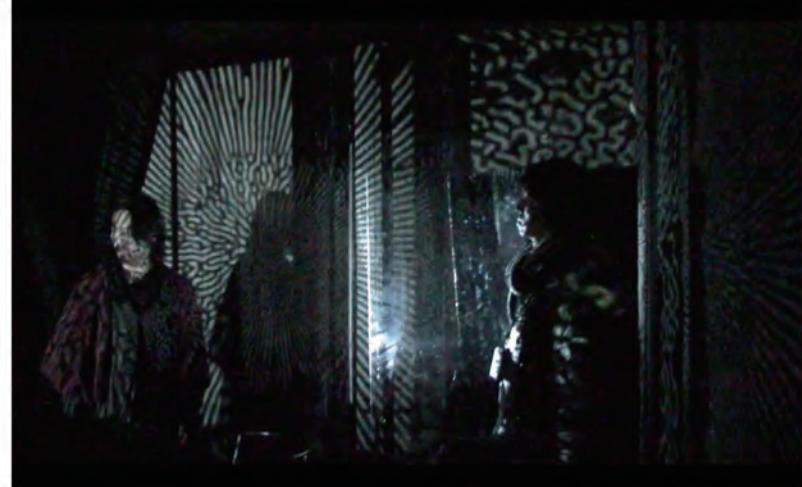


## 山内 啓司

YAMAUCHI Keiji

題　　名：誕生　生成　破壊　死滅  
素材 / 技法：プロジェクターによる映像  
大　　き　さ：100～5000 cm  
発表場所：舞台芸術公園 「橋円堂」

舞台の天井や壁、楽屋の鏡、通路など、橋円堂の様々な空間に、誕生から死滅までの時間投影する。映像はすべて、光がそれ自身の微妙なバランスが崩れることによって生まれる自己増殖作用の現象である。



## 山本 晴康

YAMAMOTO Haruyasu

題　　名：闕（いき）～内と外  
素材 / 技法：角材　荒縄　石  
大　　き　さ：w20000 × d10000 cm  
発表場所：舞台芸術公園 屋外

荒縄を角材に巻きつけて連続させ、もののつながりと作品の領域や空間との関係をテーマにした作品です。



## 樂土舎・樂土の森プロジェクト Rakudosha Rakudonomori project

題名：PERSONEL 1000 – EYE’ S –  
素材 / 技法：紙、ガラス、鉄、写真、焼土塊  
大きさ：キッチンおよびその入り口周辺  
発表場所：旧マッケンジー邸

樂土の森というコミュニティはアート（建築）と場と人によって成り立っている。構築する空間は活動の軌跡とともに増殖と再構成を繰り返している。協働によって生まれた建築群はある種の生命体としても機能しているようだ。この有機体をとらえる試みは、他者からの視点に委ねよう！それぞれの価値観と感性の集合と離散あるいは乖離は多くの示唆をもたらすであろうから・・・！



# 講演会 『芸能から見た時間・空間・身体』

星野 紘 神奈川大学特任教授

12月4日（日）11:00～12:30

舞台芸術公園 屋内ホール「楕円堂」

報告 松浦 澄江

日本平の舞台芸術公園からの冬晴れの富士山は本当に美しい。この日、楕円堂に上がり野郎畠の感触を味わいながら回廊をまわっていくと、富士が正面に見え建築と自然との調和が素晴らしいかった。講演は階下の黒一色の楕円形の舞台で行われ、ここは以前インドのケララ州の古典芸能や東北の早池峰神楽など世界各地の芸能が上演された場所でもある。

2011年の静岡アート・ドキュメントは、これまでにも増して現代美術と、静岡に存在する「時間」・「空間」との関係を表面に出し（片山廃寺、大谷の古民家、マッケンジー邸会場など）、舞台芸術センターとの共催での「視覚」及び「身体芸術」との結び付きも明確に提示するなかで非常にふさわしい講演テーマであった。

星野 紘氏は、文化財保護委員会での日本の古典・民俗芸能の長年の調査保護活動と共に、中国・ロシア等幅広い芸能研究者であり、大学での後進指導及び近年世界各国で急務となっている無形文化財保護活動の方面でも国際的に活動されている。また、大学時代には自身舞台に立ち、そして現在、広範な視野で芸能を通しての「表現の根源」をさぐる著作多数を刊行している。講演については氏の口述原稿より抜粋を紙面の許す限り載せたが美術領域にもかかわることが芸能を通して語られているため、単純に芸能の問題と割り切られる向きもあるかと、私なりの当日の記録・感想を少々記載させてもらう。また、貴重な映像の記録を挟んでの講演であった。（星野氏著書「過疎地の伝統芸能の再生を願って」に完全原稿及び写真収録 2012/7/30国書刊行会発行）

講演は、氏の接した淨瑠璃や能の人間国宝の逸話から始まった。三島由紀夫との対談で三島を困惑させた淨瑠璃太夫の豊竹山城少掾。「淨瑠璃も好きか嫌いかわからない。舞台に出て早く終わらないかと思う日もある」と。三島の現代知識人の饒舌に対して身体に徹して生きる芸能者の日常的な答えが彼を疲弊させた。能の喜多六平太は「（観客が）なんでもないこと見逃すような所に精魂込めている（能舞台でシテ方が長く座っている状態から立ち上る動き等）」と語る。心理描写や物語りではなく舞台に描く線や物質的存在、気配の様なものが重要なのであろう。

次に芸能のはじまりとしてシベリアのハンティ族の熊の靈送りの儀礼にふれ、これが「魏志倭人伝」「古事記」での貴人の葬送儀礼の歌舞と共通する点を指摘した。ハンティ族の調査はこれまでされておらずロシア研究者と共に氏が初めて記録した貴重なもの。それと似たアイヌの熊の靈送り儀礼の内の「熊の歌」で熊

自身（靈として神に近い状態）が、殺される苦しみ恐怖を語り、そして殺戮された後の自身の姿を映画のように造形的に描写する。この二つの「我」の在り方が日本の「能」の死者が亡靈となって現れ自身を客観的に語る「夢幻能」の構成に近いとみる。私はコンセプトとその表出における客觀性と、そして作品と鑑賞者との関係を考えさせられた。第三に芸能の面白さの中で、表面的でない深い面白さの表現として能の故観世寿夫の言葉を取り上げて論じた。観世寿夫は、早稲田小劇場の舞台にも立ち、その古典芸能表現者としての肉体と、現代知識人としての理論とをあわせもって、古典と現代、日本と普遍（国際性）の扉を開いた第一人者である。彼の「心より伝ふる花」の「舞台に立つこと<能のカマエ>は、無限に空間を見、しかも掌握する」能の肉体の、ストーリーを超えた存在自体の追及は、そのまま美術の領域に置きかえられるのではないかと感じ、講演は終了した。



## 講演概要

- 1、芸能の諸相
- 2、芸能のはじまり

ところで原初の頃の芸能とは一体どんな姿のものであったろうか？よく原初における芸能以前の姿は單なる所為動作にすぎなく、後にそれが繰り返されているうちに芸術性を獲得したのだと、いかにも進化論的な段階論説がもっともらしくなってきたが、実はその間の差異を説明する証拠はなにもなかったのではないか。それが表現行為である限り、当初から芸術性を有していたとみてよいのではないかと筆者は思う。熊まつりの芸能のひとつにその具体例を示してみよう。

アイヌに動物の靈語りを主としたカムイユーカラが

伝承されている。その中の熊の物語はかっては熊まつり（熊の靈送り儀礼）の折に歌われていたようだ。この「熊の歌」に、芸能は発生当初から表現としての芸術性を有していたのだとみることが出来る。山で人間に殺害され、肉体が解体され、そして里で靈送りの熊祭りを受けている熊が、自らを歌っているものに次のようなものがある。それは一人称語りの物語であるが、実はここで特徴的なことは、この種の熊の歌には、二人の“我”が存在していることである。

私は神のごと どっと斃れ伏しぬ。

…（中略）…

うつらうつらと眠りて ふと眼覚むれば かくありけり

一本の立樹の上に手をだらりと下げ 脚をぶらりと下げて

我あたり

つまり人間に殺害され、解体されて、自分の手や脚が立樹の上にぶらさげられている様を、まるで麻酔から目覚めた手術後の患者みたいに、切り取られた自らの身体を客体として形象しているのである。ここにはきわめて造形性の高い象が結ばれているように思う。原初の時代と思わせるような言語表現においてもすでに高度な造形性が働いていた可能性を思わせる事例である。実はこういった澄んだ鏡を見るようなクリアな造形性は、時代の離れた話にはなるが、我が國の中世に世阿弥によって創始されたという能の夢幻能が有するイメージにもかさなるものがあるように思われる。

### 3、芸能の面白さの表現

味わい深い面白さという事をとことん追求したのが日本の能の演技論である。それを花の概念で説明したのが例の世阿弥である。現代の能シテ方の名人と言われた故観世寿夫が『心より伝ふる花』で解釈してくれたその演技論を以下に紹介してみよう。まず花ということであるが、単にこれは珍しいことをやって見せるというような単純なことではない。

「自然の中で咲く花も、やがて咲き、やがて散りまた来年になれば咲く。舞台も芸も一回ずつ消える。いかに魅力ある舞台もその夜の内に消えてしまう。咲く側と、見る側とが、計算を立てずに「フト」出会ったとき、その「花」はどれほど美しいだろうか。」

このように観世寿夫が記していたように、芸能の花もあくまでも演者と観客の間の自然な出会いに求められるものと考えられるのである。そしてこの花は珍しいが故に花とされている。そのことについては、世阿弥の言う「めずらし」とは珍貴なことをして人の眼を驚かせるのがよいということではないのだと。あくまでもさまざま稽古という積み重ねの上に成り立たすことが大事なのであると観世寿夫は説く。そしてこの稽古で得られるものは表面的な理屈ではなく、自らがいろいろ苦労してはじめて身体で掴まえられるもののこと。能のことを研究者の横道萬里雄は「歩行舞踊」と評していたというが、確かに演者は舞台に立ってカ

マエをし、そしてハコビと称する歩行を繰り返すことが能の舞台上の主要行動である。この能の舞振りの具体的な身体表現の様相を観世寿夫は次のように説明していた。

「舞台に立っているということは、能の場合、前後左右から無限に引っ張られているその均衡の中に立つということなのだ。逆に言えば、前後左右に無限に力を発して立つ。無限に空間を見、しかも掌握する。それがカマエである。」

また能の動きには表意的な動作は少ない。抽象的、幾何学動作が割に多い。能において「歩くこと」は大変重要な意味がある。一脚出る、二足退る、あるいは黙って舞台を一巡する、それらの動作は一曲中の詞章やリズムと相俟（あいま）って非常に大きな表現を創る。また創らねばならぬ。そして演者はやはり歩くことにおいても、歩くという行為を超越して歩きたい。それがハコビである。

いま述べた、表意性が希薄な身体の動きだけに集中している能楽師の執着振りは、そこが先に引用した喜多六平太の言い振り、「皆様からは何の張合いももたれないようなところに、一生懸命に力瘤を入れる、そこに能の生命と申しますか、真骨頂があるわけですね」の意味していたところに相当する。大応にして我々現代人は複雑な網の目の精神世界にとらわれており、過去の時代のことをいかにもたわいもない単純なことのように考えがちであるが、世阿弥以来の伝統を持つ能の身体表現術には、時代精神や意味内容を超えて表現出来るものを確立している。観世寿夫は言う。

「能は、表面に現れる意味内容や現実性で理解されることを拒む、かといって、ただ形式や約束で捉えてもらうわけにもいかない。能の演技は、その立脚している中世思想の、その抽象性の美学を、からだを感じてしまわなければ出来ないのだと思う。」

能が650年後の今日も存続し続けているということは、このような中世的な論理が時代を突き抜けて通用しているということであろう。古典芸能と呼ばれている世界の面白さとはこのようにして表出されているのである。



# 公開研究会 「アートの住まい 憧れを「田舎」に求めて」

この公開研究会は、「近代日本住宅史における「田舎」への志向に関する研究」の一環として企画された。

この研究は、近代日本住宅史において近代数寄者の建設した「田舎家」を主に取り上げ、現代において環境意識とともに高まってきた「田舎」への志向に歴史的資料を提供するもので、4年間継続のうち3年目にあたる。ここでは、「田舎家」の位置づけを通じて、近代における「田舎」への志向およびその系譜の解明のために、建築史を基盤としつつ、周辺領域の研究者との意見交換、専門的見解の聴取等を行い、これを公開研究会というかたちで一般にも公開したものである。

日時：2011年12月10日（土）12：00～14：00

会場：静岡県舞台芸術センター舞台芸術公園

静岡市駿河区池田79-4

パネリスト：

水沼淑子（関東学院大学人間環境学部教授・住居学）  
堀田典裕（名古屋大学大学院環境学研究科助教・環境デザイン）

栗野 隆（東京農業大学地域環境科学部助教・造園学）  
コーディネータ：

土屋和男（常葉学園大学造形学部准教授・建築史）

「　　」の意味

「田舎」について考えてみたい。

現代の建築界では「田舎」を悪い意味で使うことは少なくなったようだ。環境意識の高まりもあって、「田舎」は理想の場所とさえいわれることがある。しかし田舎はいつの時代も同じように「田舎」ではない。「田舎」への評価は、近代化、都市化と裏腹の関係にある。

辞書を見ると、田舎は「都会から離れた土地」とあって、都市との関連から定義されている。英語のcountryも「（都市の）反対側の土地」という語源をもつ。田舎は都市の文化の合戦鏡として、その価値が変動してきたのだ。単なる土地ではなく、文化的な価値観を反映した土地として田舎を考えるために、「　　」の意味がある。

現代の「田舎」ばかりは、都市的、人工的な文明に疑いと翳りが見えていることの裏返しである。それは同時に、かつての田舎でも、人々の生活が都市化したことを見ている。車でショッピングモールに行けばたいていのものは手に入るし、新しく建つ家は、どの地方のものかも見分けがつかなくなっている。近代化が一定の段階を迎えると、だれもが便利さを享受できるようになったからこそ、「田舎」が評価されるようになったと思われる。

「田舎」はいつから「よき場所」になり、田舎の家であった民家はいつから「理想の住まい」になったのか。そのルーツと現代的な意味を考えてみたいというのが、この研究会の目論見であった。

「田舎家」と民家

具体的には「田舎家」に着目したい。

「田舎家」とは、日本で近代化が進んだ大正期から昭和初期を中心に、近代数寄者と呼ばれる富裕層によってつくられた住宅のひとつのタイプである。「田舎家」は古い民家を移築し、手を加え、別荘や茶室として改修したものであり、理想的な「田舎家」となる民家は、かつて庄屋を務めたような草葺きの大きな家で、これを地方から探し出し、都市郊外や別荘地に移したのであった。静岡県は湘南から続く、そうした別荘地であった。

「田舎家」は郊外や別荘地という敷地としても、移築を可能にする移動手段としても、さらに大規模農家が手放されるという社会的状況としても、その成立には近代化が不可欠な建築であった。一見、その姿は一般的な近代の印象とは逆に、前近代の農村を思わせる。その姿が示すのは自然への志向であり、それが財力と教養を備えた者のよき趣味の表現であった。「田舎家」を可能にした近代化と、「田舎家」が表象している志向や趣味とは背反しているかのようだ。しかし、近代化によって数寄者らは田舎へと向かい、そこになじむ建築として、民家を発見したのであった。そして前近代までの民家は、近代の眼によって数寄者の「田舎家」となったのだ。

代表的事例：益田鈍翁小田原別邸・掃雲台

益田孝（1848～1938）は近代日本において三井財閥の成長に尽くした実業家であるが、彼は鈍翁と号し、近代数寄者のなかでも最大の影響力を持った人物であり、「田舎家」の実践的提唱者であった。

小田原別邸・掃雲台は、広大な敷地のなかに各種の建物が点在していた。邸内の建築物の確認申請のために描かれた図面を用いて、敷地、建築物の復元的考察を行っている。

敷地内は邸宅・茶室ゾーンと農業・軽工業ゾーンに大別できる。前者は高部2/3程度で、敷地内ほぼ中央の主屋を中心に、邸内に数多くの茶室が点在していた。後者は低部1/3程度で、鶏舎、缶詰工場、毛織物工場、従業員宿舎などからなり、農園と工場が経営されていた。全体として日本風のカントリー・ハウスを実現し、一種の理想的環境の実験場という様相を呈していた。

南斜面の邸内には、多くの建物が点在しており、移築、改築が頻繁に行われていたが、「田舎家」も複数存在した。なかでも「觀濤莊」は、昭和4年に名古屋地方から移築されたという、土間と8畳4間を含む大規模な入母屋茅葺きの「田舎家」であった。

小田原という場所は、歴史的逸話も多い江戸文化圏の辺境であると同時に、東京から鉄道で数時間で到達できる場所でもあった。また箱根山の入口であるとともに、明治以後出現した湘南海浜別荘地帯でもあった。そこは近代文明の便利さを享受しつつ、山水を満喫できる理想の「田舎」であった。

### パネリストからの報告

水沼氏からは、神奈川県湘南の別荘地に関して、近代初期における別荘地形成の文化的背景、大磯における土地所有の詳細な変遷、そこに建つ草葺き屋根をもつ建築物の姿等について、「田舎」への志向の具体的な事例報告があった。

堀田氏からは、愛知県知多半島の「農神園」を事例として、海浜住宅地の開発に関する報告があった。頭痛薬「ノーサン」の販売で財を成した経営者が、健康的な住宅地を目指した事例で、別荘地というひとまとまりの環境における「和風」、漢方薬園としての「花苑」に対する解釈が示された。

栗野氏からは、近代日本の「田舎」への志向を、庭園の観点から報告してもらった。特に近代数寄者らの住宅の、台地上への占地、陸繫島の一体化という立地上の特徴と、それを活かした作庭について実証的に示された。遠山元一邸を例とした洗練と素朴の相克等、非常に興味深いものがあった。

### 公開討論から

パネリストが発した「セレブな田舎」という表現が話題になった。これは計らずして「田舎」の価値は、田舎からは見出されないという定説に触れるものとなった。すなわち、「田舎」を享受するという感覚は、基本的に都市の論理に基づくということである。もともと、近代の富裕層たちが「田舎」を志向したとき、それは自分たちが進めた近代化によってもたらされた、都市の環境や規制から逃れるためであった。

古来の例を見ても、オギュスタン・ベルクの書物が説くように（『風景という知』世界思想社、2011、p.67）、史上はじめて風景を賞賛した中国の詩人のまわりには、教養人で身分の高い彼の世話を多くの付き人がいたであろう。都市の論理は、田舎の労働を見ることなく（ベルクの用語では「外閉」）、そうしなければ単なる田舎は「田舎」にはならないのである。近代以降はその労働を、自動車を代表とする機械に請け負わせ、より大胆に、より大きなエネルギーによって（つまり、より大きな環境負荷によって）、「田舎」の渉獵が進んだのである。

湘南のように「田舎」の価値が確立した場所では、投機的な土地取引の動きが現れる。人々の憧れの場所では、より高密に、より高層に土地を開発すれば、多くの利益を生むからである。一方で、「田舎」の価値を存続させようとすれば、開発は抑えられることが望ましい。開発の論理を許せば、結局は「田舎」の価値は減じてしまう。ここに「田舎」の論理的矛盾がある。すなわちそれは、都市の論理を基盤としながら、同時にそれを否定する宿命を内包しているのだ。この矛盾に向き合うことが、「田舎」を考えることの意義でもある。

最後に、会場のアーティストから、「田舎」のよさは何といっても都市ではできないことがやれる自由だ、という意見があった。都市ではルールという名の規制が覆い尽くしており、実験的な試みはほとんど不可能

に近い。規制によって開発を抑制しつつ、同時に都市にはない規制の緩さを有効に生かせるような、実験場としての「田舎」を探ることが求められているのである。



益田鈍翁小田原別邸・掃雲台 右に「田舎家」



遠山元一邸玄関（昭和11年）



公開研究会会場風景

(土屋和男)

謝辞：

この公開研究会は平成23年度科学研究費補助金（基盤研究C：課題番号21560677）（代表研究者：土屋和男）を受けた研究の一部である。記して謝意を表します。

## 特別企画

### ■ SPAC 俳優によるアート作品の中での朗読パフォーマンス

#### オープニングパフォーマンス『馬鹿の国と阿呆の国』

12月3日（土）13:00 舞台芸術公園 入場無料

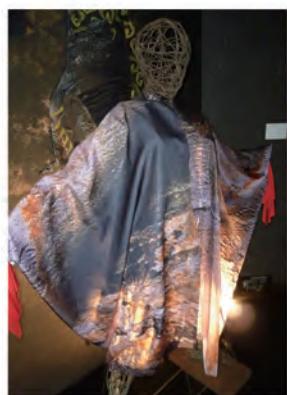
演出：大岡淳 出演：石井萌水、木内琴子、永井健二、布施安寿香、若宮羊市

立体作品（第一部『馬鹿の国』）夏池篤『<金谷 - 舞台芸術公園>往復便』 柴田美千里『プラボー！』

映像作品（第二部『阿呆の国』）山内啓司『誕生 生成 破壊 死滅』 杉森順子『不確実という確実』



### ■ SPAC ステージワークス展示（舞台美術模型、デッサン、舞台衣裳、装置写真など）



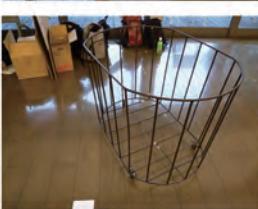
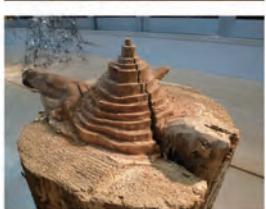
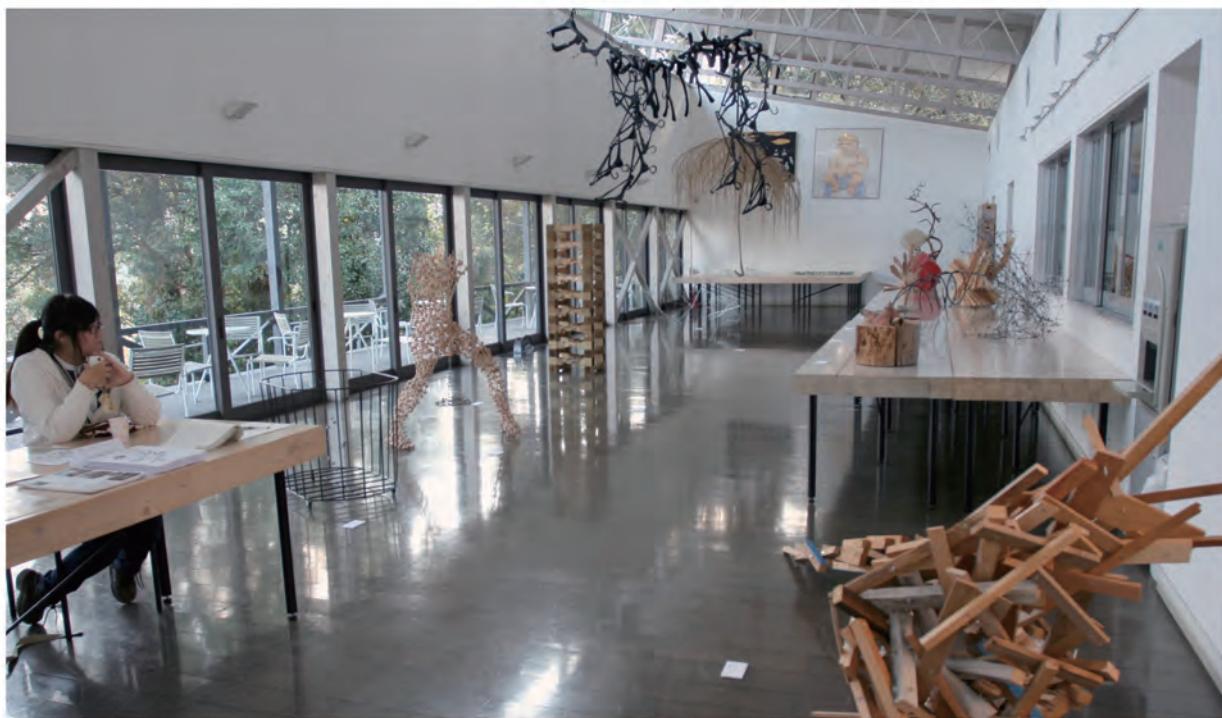
### ■各劇場の公開ツアー



## 学生作品<常葉学園大学造形学部アート表現コース2年、3年、4年>

会場：舞台芸術公園 食堂棟「力チ力チ山」

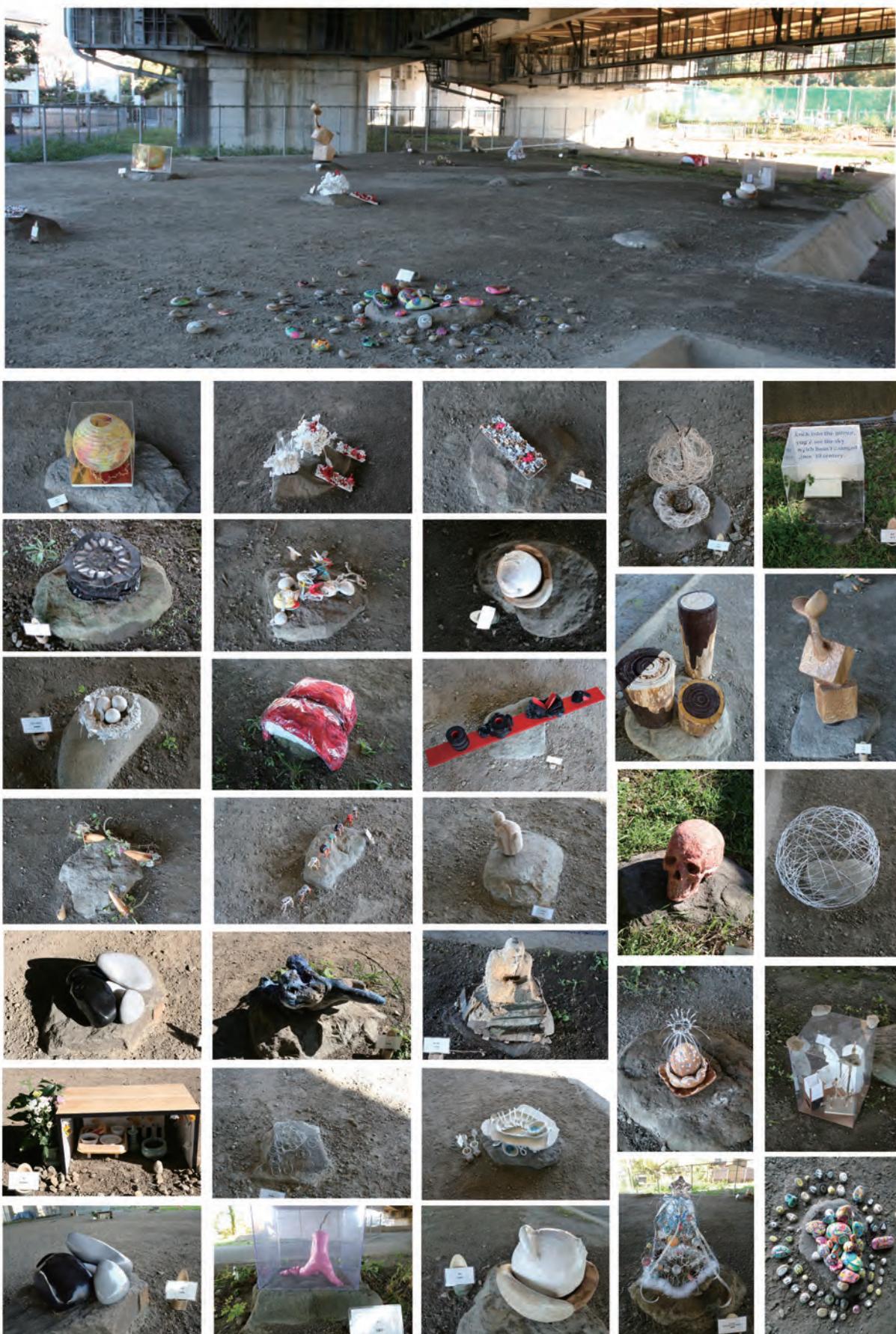
作品展示学生：大東孝行、曾根勇吾、深澤佳介、星野広樹、三上俊希、山下静樹、池田奈津希、片山静、加藤理子、田村典子、渡部沙羅、長谷川真弘、二村好紀、原田悟志、中林彩、前田美緒、小川亮、小玉健司



## 学生作品<静岡大学教育学部2年、3年>

会場：片山廃寺跡

作品展示学生：大井千明、大原千晴、加藤麻美、加藤玲奈、木根結、沢井美幸、滝波東菜、望月美穂、安松美由紀、大和田彩果、小野恵理、上條美沙子、那須愛、三浦真由子、山下広将、佐野翔、柴崎陽子、杉山宏樹、高野緑、谷正輝、卞陽子、岩崎美咲、大橋里沙子、片瀬美香、倉前幸加、佐藤遼、高橋雄大、谷口成美、原康隆、柳沢真理、山本勇実、今岡祐介



## 学生作品<静岡文化芸術大学大学院1年>

会場：舞台芸術公園食道棟「カチカチ山」芝生

作品展示学生：眞野美帆



32 オープンカフェ（鑑賞者との交流企画）

大谷の古民家（大村邸）



静岡アートドキュメント2011において、ビジュアルデザインコースでは告知のためのポスター、チラシ、ホームページなどのデザインを、学生が中心となって担当した。

メインのポスターは学生によるコンペ形式とし、幅広いアプローチの中から選定された。今回は4カ所での展示ということで、各々の「場所性」と、3月の大震災の記憶をオーバーラップさせたビジュアルで構成している。

### [参加学生]

造形学部 ビジュアルデザインコース 3年生 (2011年12月)  
工藤駿/川島彩/後藤知里/杉本知穂/杉山未紗  
殿岡詩織/伏見美紀/前島香澄/山本実佳

#### ■メインポスターデザイン

B2正寸 728mm×515mm

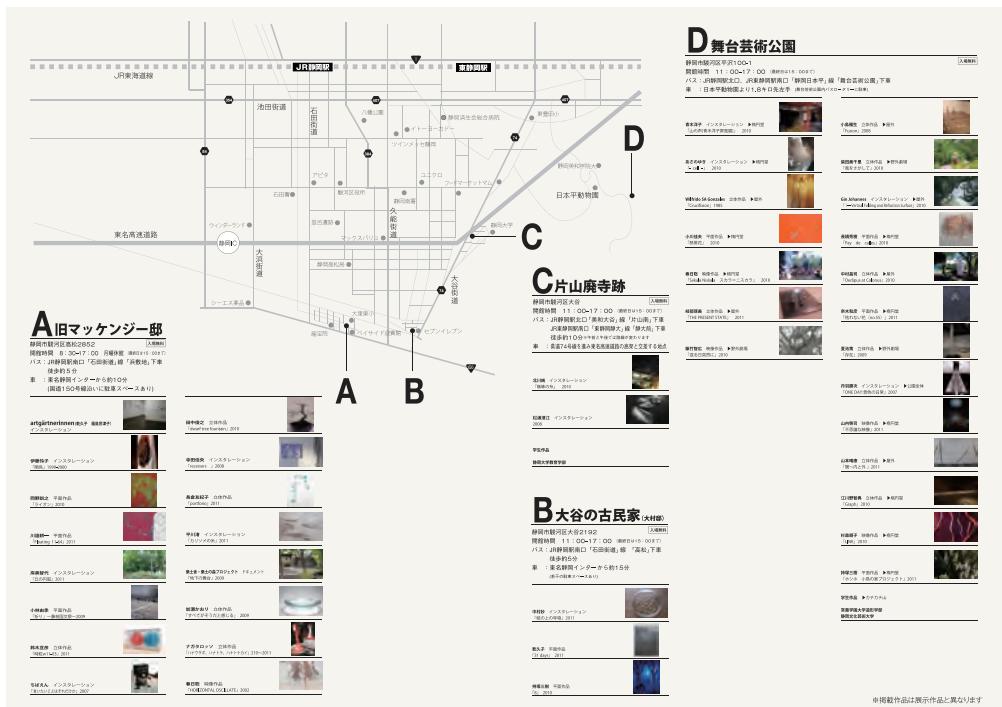


写真:川島彩 デザイン:工藤駿

## ■チラシデザイン



オモテ面



中面

## ■Webサイトデザイン

**SHIZUOKA ART DOCUMENT 2011**

TOP S.A.D. ARTIST ACCESS EVENT

SHIZUOKA ART DOCUMENT 2011

12月  
3sat.-11sun.

舞台藝術公演  
片山徹泰  
大谷の古民家  
田マッケンジー郎

希望の場所  
追憶の場所  
身体の場所

SHIZUOKA ART DOCUMENT 2011

TOP S.A.D. ARTIST ACCESS EVENT

「singave at gait」  
1988年(ラグノ)

SHIZUOKA ART DOCUMENT 2011

TOP S.A.D. ARTIST ACCESS EVENT

ナガクロッソ／rosso nagata

SHIZUOKA ART DOCUMENT 2011

TOP S.A.D. ARTIST ACCESS EVENT

持塙三樹／miki mochida